

国立音楽大学附属中学校入学試験問題

令和五年二月一日

国語

※解答はすべて解答用紙に記入すること。

一、次の①～⑩の——線について、漢字は読み方をひらがなで書き、カタカナは漢字に直しなさい。

- ① 心を育む。
- ② 次の停留所で降車する。
- ③ 清水がわき出る。
- ④ 雷鳴がとどろく。
- ⑤ この話の出典は『伊勢物語』だ。
- ⑥ 虫をカンサツする。
- ⑦ 日本のレキシを学ぶ。
- ⑧ 明日のテンコウを予想する。
- ⑨ お金をセツヤクする。
- ⑩ 目標点にタツする。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(問いの関係で、一部省略している部分があります。)

市場の要※1に※2いるのが、卸おろしです。卸は、全国の生産者から集しゅうかまってくる商品を集荷なかおろしして、仲卸や小売店に分配、販売はんばいします。

その過程で、売る側と買う側の間に入って、生産者と仲卸、小売店の両方が納得できるように、値段と取引量を調整します。

(中略)

売り手と買い手の間の取引交渉こうしょうは難しいものです。売る側はもちろん高い値段で売りたい。買う側は安い値段で買いたいと、全く逆の希望を持っています。またお互いの手の内※3ももちろんわかりません。卸はこの難しい状況※4をどう解決するのでしょ※5うか。だからこそ、卸という間に入る審判役しんぱんやくが必要になるとも言えます。一般的には、売り手と買い手との間の取引交渉は、どちらが引ひつ張る力が強い※6かという、綱引関係つなひきに似ています。

売り手と買い手のどっちが引つ張る力が強い※7か、それとも同じか。売り手の方がどうしても売りたいければ、値段を **A** でも売り切りたい。この場合は **B** の方が引つ張る力が強く、主導権を握にぎっています。

逆に買い手の方がどうしても買いたければ、値段が **C** になっても買いたい。この場合は、**D** が主導権を握り、引つ張る力も強くなります。

双方そうほうの引つ張る力が同じなら、主導権の取り合いで値段も簡単には動かなくなり※8ます。

X、イチゴは出始めからしばらくは、出荷量が増えても値段はあまり動かないのですが、それは、その時期の売り手と買い手の引つ張る力が釣り合つっているからです。逆に、旬しゅんの時期を過ぎて、値段が急激に下がっていくのは、買い手側が主導権を握り、値段が下がらなければ買わなくなっているからです。こうして見ると、イチゴの場合は、結局は買い手が綱引の主導権を握り、それが値段に反映し、下がっていくことがわかります。

綱引の審判が最終的に勝負の決着みきわを見極めるように、卸は、審判役として、売り手と買い手の双方が受け入れられる値段と数量を決める役割を果しています。

しかし、卸には、生産者と買い手との間をさばく審判役としての難しさもあります。それは、厳密に言うと、卸と生産者の間には、二つの取引③のかたちがあるからです。

一つは、生産者から手数料と引き換えに買い手への販売を頼まれる、つまり委託いたくされる場合。もう一つは、生産者から仕入れて、さらに買い手に卸す場合です。言い換えれば、卸が生産者から購入しゅうにんしたものを、再び買い手に販売するかたちです。

いずれの場合も、卸は生産者と買い手との間の真ん中④に⑤いることには変わりはありません。ただ、その立場は実際にはまったく異なります。その違いを明らかにしてみましよう。

最初の委託される場合、卸は高く売ってほしい生産者と、できれば安く買いたい買い手との間に立っています。双方が納得するよう⑥に、そこまで高くなく、安くなりすぎないところで決着することだけを考えていけばいい。自分は既に生産者から手数料を受けとっている⑦ので、いずれにしろ自分のふところは傷みません。だから自分には損得は出てこないのです。

Y、もう一つの買い取る場合は、うまくさばかないと自分のふところが傷み、損が出てしまいます。生産者から一旦購入して、それを卸し、売りさばくわけですから、そこで損を出すわけにはいきません。購入した値段よりも安く卸すわけには決していきません。例えば、生産者から500円で仕入れて、700円で卸せば、200円の利益が出てくるから問題ありませんが、仮に300円で卸すことになる200円の損が出てきます。Z、真ん中にいるとは言っても、実は生産者と同じでなるべく高く卸したいと考えています。買い手のなるべく安く買いたいという要望には応えにくい難しい立場にすることがわかります。こうして見ると、卸は審判役というよりも、高く売りたい売り手と安く買いたい買い手との間に入って板挟みの状態にあると言えないこともあります。

いずれにしろ、卸は生産者側のより高い値段への要望と買い手側のより安い値段への要望に同時に応えなければなりません。通常は、安く買って高く売ることによって利益を出すものなのですが、この場合はまったくその逆になっています。日々決着が着いているということは、そこをうまく卸がさばいていると見ることもできます。

(徳田賢二『値段がわかれば社会がわかる』より)

(注) ※1 「市場」…ここでは、品物が売り手と買い手の間で取引されたり、価格が決定したりする場のこと。

※2 「要」…そのものを支える上で最も大事な役割を果たす部分。

※3 「手の内」…心の中の考えや、計画。

問一 —— 線①「この難しい状況」とありますが、売り手と買い手の取引交渉はどのようなところが難しいのですか、説明しなさい。

問二 —— 線②「売り手と買い手との間の取引交渉」の様子を筆者は何にたとえていますか。文中から五字以内で抜き出して答えなさい。

問三

Ⓐ

↳

Ⓓ

 に入る言葉として最もふさわしいものを、次のア～カの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 上げて イ 下げて ウ 高く エ 安く オ 売り手 カ 買い手

問四

X

 ・

Y

 ・

Z

 に入る言葉として最もふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア しかし イ また ウ したがって エ なぜなら オ 例えば

問五 —— 線③「二つの取引のかたち」とありますが、文中から「二つの取引のかたち」に当たる内容をそれぞれ探し、「くかたち。」に続くように答えなさい。

問六 —— 線④「その違い」とありますが、二つの取引のかたちにおいて、卸の立場はどのような点で異なるのですか。最もふさわしいものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 販売を委託される場合は、手数料を受け取って、売り手と買い手の双方が納得するように調整することだけを考えればよいが、生産者から品物を買取る場合は、うまくさばかないと自分に損が出る点。

イ 買い手側が主導権を握っている場合は、売り手を保護するために品物の値段や仕入れ数を調整し、逆に売り手側が主導権を握っている場合は、買い手が損をしないように値段や仕入れの数量を決める点。

ウ 取引の損得が自分にふりかかる場合は、自分が損をしないように計算して品物をさばくが、自分が損得に関係のない場合は、生産者の立場に立って品物なるべく高い値段で卸すようにする点。

エ 売り手から品物の販売を委託される場合は、売り手と買い手の間で板挟みの状態に落ちるが、生産者から品物を仕入れて、さらに買い手に卸す場合は、審判役として双方を納得させればよい点。

問七 文中の「卸」の役割について、正しいものをすべて選び、記号で答えなさい。

- ア 価格や出荷量の調整を行い、旬の時期にある商品の値段が動かないようにしている。
- イ 取引のかたちによっては、自分も利益を追求し、損が出ないように取引をしている。
- ウ あらゆる商品の価値を見極め、適正な値段をつけて市場に売り出している。
- エ 売り手と買い手の双方が納得できるように、品物の値段や取引量を調整している。
- オ 市場でトラブルが起こったときに、審判役として問題を解決している。

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学校六年生の河辺と山下とぼく(木山)は、町外れに一人で暮らす「おじいさん」と関わりを持つようになった。おじいさんは、かつて戦争に行く前に、“古香弥生”という人と結婚していたが、戦争が終わっても、傷付いたおじいさんは古香さんのもとには戻らず、二人は生き別れとなっていた。ぼくたち三人は古香弥生さんを探しだして、おじいさんに会わせたいと考えるが、苦勞して見つけた古香弥生さんらしきおばあさんは老人ホームに暮らしていて、おじいさんのことは覚えていなかった。後の文はそれに続く文章である。

「あのおばあさんのことなんだけどさ」

「このあいだの」

①「だれかに似ていると思わない？」

え、と河辺と山下は顔を見あわせた。

「だれかって」

「わかんないかな」

「あ……！」山下がぼくを見た。

「だろ」

「うん、似てる」

「だれだよ」河辺はまだわからない。

「池田種店の、ほら」

「あのおばあさん？」

「似てないか」

「似てる」

ぼくたちは、あの老人ホームでおばあさんに会ったことをおじいさんに話していなかった。

「あのおばあさんに頼むってというのは、どうかな。種屋のおばあさんに」

「頼むって、なにを」

ぼくは、計画を話した。

②もしお化けに会ってしまったら、あんな顔をするんじゃないか。古香さんだよ、とぼくたちがおばあさんを連れて行った時、おじいさんはまさにそんな感じだった。ぼくたちは、コスモスが咲きそうだから見に来てよ、と池田種店のおばあさんを連れだし、おじいさんの家までの道々、おばあさんに古香弥生さんになってほしい、と頼んだのだ。理由ももちろん説明した。今でもその人のことを忘れていないということ。会って話したいにちがいないということ。

「とっても喜ぶと思うんだ」

どうでしょうねえ、とおばあさんはしばらく考えていた。

「ほんとにあたしのこと、その方だと思っただけでいいんでしょうかねえ」

「だいじょうぶ。すごく似てるんだ。小さくて、色が白くて、おでこの丸いところなんか」

おばあさんは、おでこに手をあてて、ちょっとしわをのぼした。

「ぼっちゃんगत、よっくお考えの上のことでしょうね」

「うん」

「承知いたしました。あたしは、その方を悪く思っ**B**てはいない、そう言えばよござんすね」

「よござんす」山下が答えた。

庭の真ん中で、洗濯物のたらいを抱えて、おじいさんは突っ立っている。おばあさんは、困ったようにぺこんとおじぎをしたきりだ。イ干したばかりのステテコが、気楽そうにぶら下がっている。

「こっちに座ったら」山下が、縁側から声をかけた。麦茶を入れたコップがふたつ、ちゃんと用意してある。「勝手知ったる他人の家、だもんね」

けれどもおじいさんは、山下を見もしなかった。こわい顔をして縁側に**A**歩いて行き、急にふりかえると「どうぞ」とおばあさんを招いた。そうして、たらいをしっかりとつかまえたまま、勢いよく蚊とり線香の上にお尻をのせてしまった。

「あちちちっ」

おばあさんが、くすり、と笑った。おじいさんは、ますますこわい顔をしている。ぼくは山下を手招きした。外野は**B**消えるべし、だ。

翌日、いつものように塾が終わると、昼食のパンを持って、ぼくたちはおじいさんの家に行った。おじいさんは、黙ってアイロンをかけている。部屋のなかは、夏の暑さとアイロンのおいでいっぱいになっている。

おじいさんは、白い座布団カバーに霧を吹きかけて、熱いアイロンをあてる。ぐっと力をこめてしわをのぼすと、アイロンを台の上に置き、座布団カバーの位置を動かして、また霧を吹く。アイロンを握りしめたおじいさんの手は、青い筋が何本も浮き上がっている。暑いのにアイロンなんてあとにしたら、それよりお昼にしよう、なにもないようだったら買い物行ってこようか、それとも目玉焼きでもつくろうか、などとぼくたちが言っても相手にしない。

「ね、どうだった」河辺がたまりかねて切りだした。「ね、きのう」

おじいさんは、アイロンのコードを抜くと、破れて綿のはみでた座布団に、糊のよきいたカバーをかぶせはじめた。なにも言わない。ぼくたちは顔を見あわせた。

「会いたくなかったの」山下が**C**きいた。それでも返事がないと、山下はぼくの顔を責めるみたいに見た。ほらみる、おまえがへんなこと言い出すから、と言わんばかりだ。

「なにか、怒ってるわけ」ぼくはちよつと不満だった。新品みたいになった座布団を四枚重ねて、おじいさんは、ぼくをじろりと見た。

E「あの人はな、おまえらのことを叱らないでくれと、頼んで行ったんだぞ」

「すぐわかったの」

「あたりまえだ」

「で、怒ってるんだ」

おじいさんは、四枚重ねた座布団に、ひじをつけて寄りかかった。「あの人に嘘なんかつかせて。そういうのを、ぺてんと言うんだ」

「ぺてんなんてことないだろ！」すぐ逆上する河辺がわめいた。

「馬鹿者！」

F一瞬、ぼくのおしりが三センチくらい飛び上がった。おじいさんのそんな声を聞くのは初めてだ。

「悪気はなかったんだよ」

「悪気とか、そういう問題じゃない」

「じゃ、どういう問題なんだよ」河辺はまだわめいている。

G「ひとの人生に猿芝居を持ちこむなってことだ」

おじいさんに暗い声でそう言われると、ぼくはほんとうにしゅんとなってしまった。頭が悪いとか、顔がまずいとか、性格が暗いとか、そういうことより、もつと決定的にきびしいことを言われた感じがしたのだ。

「すごくいいアイデアだと思ったんだよ。あんまりあのおばあさんが似てるから」

長い沈黙。ぼくは、あれ？と顔を上げた。おじいさんがぼくをにらんでいる。

「どういことだ」

ぼくはようやくやく、しまった、と気づいた。

「あのおばあさんが似てるって、どういうことだ」

河辺もぼくをにらんでいる。「木山のバカ」

山下が、もうだめだよ、と言うように首をふった。

「会いに行ったんだ」ぼくはしかたなく答えた。

「見つけたのか」

「うん」

ぼくは最初から順に話した。^{※4}電話をかけたこと。古香弥生おばあさんがいた老人ホームのこと。老人ホームに入る前は、妹とその息子^{むすこ}の家に行ったこと。

「それで、元気だったか」おじいさんの、はげ頭のとっぺんしか、ぼくには見えない。

「うん」

「なにか言ってたか」

ぼくが答えずにいると、おじいさんは、顔をあげてぼくの顔をじつと見た。

「忘れてたよ」

「そうか」

「ぼけちゃってるんだ。自分のだんなさんは、とっくに死んでしまったと思ってる」

まあな、とおじいさんは小さく笑った。「そりゃそうだろう。死んでも同然なんだから」

「だけどちがうんだ」

セミの声がうずになってぼくたちをとりまく。オーシーツクツク、オーシーツクツク、オーシーツクツク、オーシーツクツク、オーシーツクツク、オーシーツクツク……何重にも重なったセミの声に耳をふさがれて、自分の声が、だれか別の人の声のように遠く聞こえた。

「英雄^{えいゆう}なんだ。死んだだんなさんは、英雄だと思ってるんだ。戦争の時、ひとりで爆弾^{ばくだん}を背負って敵のなかに突っ込んで行ったって話をしてたよ。すごくくわしく、見てきたように話すんだ。嘘だなんて信じられないくらい」

⑨「そういうのは、嘘って言わない」河辺がぼつんと言った。

「そうだな。嘘とはちがう」おじいさんはうつつむいたままだ。「遠かっただらう、そこ」

「すこし」

でもそのあと、おじいさんは「余計なことをするな」と言って、ぼくに背中を向けてしまった。

(湯本香樹実著『夏の庭 -The Friends-』(新潮文庫刊)より ※一部改変あり)

(注)※1「ステテコ」:主に男性がはく、すその長さがひざ下くらいまでの下着。

※2「べてん」:うそをついて人をだますこと。

※3「逆上」:激しい怒りや悲しみのために、取り乱すこと。

※4「電話をかけたこと」:ぼくたちは古香という名字の人の電話番号をかたっぱしから調べて、電話をかけて古香弥生さんを探した。

問一——線①「だれかに似ていると思わない?」とありますが、《だれか》とは具体的にだれですか。文中の言葉を使って答えなさい。

問二——線②「もしお化けに会ってしまったら、あんな顔をするんじゃないか」とありますが、そのときのおじいさんはどのような様子だったのですか。最もふさわしいものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア、二度と会えないと思っていた奥さんに再会することができて、心から喜んでいる。

イ、かつての奥さんによく似た人が突然現れたことに驚き、ぼう然としてしまっている。

ウ、亡くなった奥さんにそっくりの人を見て、死んだ人に会ったかのようにおびえている。

エ、奥さんに会えることを期待していたのに、にせ者が現れたのでがっかりしている。

問三……………線A「その方」、……………線B「その方」とは、それぞれだれを指しているのですか。文中の言葉を使って答えなさい。

い。

問四 次の各文は、文中の「……」線ア～エを抜き出したものです。このうち「擬人法」が用いられているものはどれですか。最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア おばあさんは、困ったようにぺこんとおじぎをしたきりだ。
- イ 干したばかりのステテコが、気楽そうにぶら下がっている。
- ウ 座布団カバーの位置を動かして、また霧を吹く。
- エ 山下はぼくの顔を責めるみたいに見た。

問五 ——線③「勝手知ったる」、④「外野」の意味として最もふさわしいものを、次のア～エの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ③「勝手知ったる」
 - ア あまり人が出入りしない
 - イ 自由に使って良い
 - ウ 家の人と親しくしている
 - エ 様子をよく分かっている
- ④「外野」
 - ア 直接関係のない部外者
 - イ 余計なおせっかいを焼く人
 - ウ 孫ほど年の離れた子ども
 - エ 血のつながらない他人

問六

A
・
B
・
C

に入る言葉として最もふさわしいものを、次のア～エの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア おずおず
- イ とつとつ
- ウ すたすたと
- エ すごすご
- オ そそくさ

問七 ——線⑤「あの人はな、おまえらのことを叱らないでくれと、頼んで行ったんだぞ」とありますが、《あの人》はなぜ叱らないでくれと頼んだのですか。その理由を《あの人》が誰かを明らかにしつつ答えなさい。

問八 ——線⑥「ぼくのおしりが三センチくらい飛び上がった」とありますが、ぼくはなぜ飛び上がったのですか。その理由を答えなさい。

問九 ——線⑦「ひとの人生に猿芝居を持ちこむってことだ」と言った時の、おじいさんの気持ちはどのようなものですか。最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア つらい思い出を忘れようとしているのに、戦争に関する話を持ち出さないでほしかったという気持ち。
- イ どうせだますなら、本物の古香さんと思えるくらいの、上手な演技をしてほしかったという気持ち。
- ウ ぼくたちがわざと古香さんのにせ者を連れてきて、自分を笑い者にしたのではないかという気持ち。
- エ 自分の気持ちを理解したつもりになって、浅い考えでのお節介はしてほしくなかったという気持ち。

問十 ——線⑧「しゅんとなつて」とありますが、このようなぼくの様子を表す表現として最もふさわしいものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 泣き面に蜂
- イ 猫をかぶる
- ウ 青菜に塩
- エ 猿も木から落ちる

問十一 ——線⑨「そういうのは、嘘って言わない」とありますが、なぜこのように河辺は言ったのですか。最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア ぼくのした話が、ぼくがとつきについた嘘の話だと思われるので、自分までおじいさんに叱られてしまうから。
- イ おばあさんの話は事実ではないが、本人は信じていることで相手をだまそうとして言ったことではないから。
- ウ おばあさんの話は、本当に戦争を体験した人にしかわからないくわしい内容で、信用することができたから。
- エ 実際におじいさんはおばあさんのところに戻らなかったため、戦争で死んでしまったも同然だと言えるから。